

に在つて家督を受けた。案するに尊經閣藏富樫氏遺孫大桑氏系圖に、『恒泰、泰高養子。介。法名通安。號三泰雲寺殿。天文四年五年十一日卒死。一本作『植泰。』とある。植泰は永正十年將軍義尹が義種と改めた後の名であらうと思はれるが、之を恒泰としたものは字形の類似から來た誤謬で、その別名とは思はれぬ。

**トガシナリハル 富樫成春** 教家の子。幼名鶴童丸。教家嘉吉元年六月將軍足利義教の意に忤うて京師を亡命した後、その遺臣等成春を奉じて、叔父泰高と加賀國を争うたが、文安四年五月二人は各その半を領し、共に富樫介を稱することに妥協した。成春の所領は北部で、野市であつたのである。然るに成春はその後失政して亡命した如く、長祿二年將軍義政はその領を赤松政則に賜ふことになり、成春は寛正三年流離の中に歿し、法名を大仙寺といふた。子政親その後を承ける。

**トガシノスケ 富樫介** 富樫氏は忠頼の時から加賀介に任ぜられ、吉宗・宗助を経て家國に至つた。家國石川郡富樫郷に居るを以て初めて富樫介と稱し、信家・家近相承け、家經は早世して家直・泰家後を襲いだ。泰家文治元年頼朝に召されて加賀の守護となるに及び、既に朝廷より派せられた國衛の次官ではなく、幕府の地方職員となつたわけである。しかも泰家及びその子孫は尙富樫介を通名とした。

**トガシノソウシヤ 富樫惣社** 白山禪頂由來記に、毎年六月十八日白山禪頂朝戸開之參詣井上道者入目之日記を載せて、神樂錢富樫

惣社同金劍宮二百文云々とある。同は富樫の略であり、金劍宮は即ち富樫郷か富樫庄かの惣社であると思はれるが、今詳かでない。

**トガシノブイヘ 富樫信家** 家國の子で、次郎と稱した。尊卑分派大系圖に信家は白山の總長吏に補せられ、合戦の時討たれたとある。その討死の年紀も地處も明らかでない。

**トガシノマツ 富樫の松** 石川郡野々市新の邑長瀬尾吉郎兵衛の庭前に、富樫の松と稱する古木があつた。吉郎兵衛も富樫氏の庶流であるといひ、元旦にこの松の樹皮を酒に浸して飲むを佳例とした。俗に之を御帳面松といふたのは、藩の公簿に登錄せられてゐる意である。明治十三年之を伐倒した。

**トガシノヤカタ 富樫ノ館** ノノイチカシノセキ 野市館述。トガシノヨウ 富樫城。トガシノリイヘ 富樫教家 滿春の次子。永享五年閏七月兄持春が早世した爲に家を繼いだもので、滿濟准后日記には同年九月十五日の條に、『富樫刑部大輔今日初出仕』とある。然るに嘉吉元年六月十八日將軍足利義政の意に忤うて失踪し、爾後その子成春と成春の叔父泰高との間に相續の争を惹起した。教家の歿年は知れないが、文安四年とする説は誤である。法名禪興寺。

**トガシハルサダ 富樫晴貞** 植泰の次子。通稱小次郎。一諱泰繼・晴泰又は晴時。天文四年五月植泰が越前で死し、晴貞のその後を受けたことは、天文日記天文五年閏十月十九日の條に、『富樫小次郎方より舊狀並太刀之代百疋馬代來候。是は富樫代始祝儀に來』とあるによつて知られる。元龜元年四月織田信長越前に入つて朝倉氏を攻め、晴貞に對して亦

出陣を促した。晴貞は將軍足利義昭の教書を得たので、將に之に應ぜんとしたが、國中の士民等信長が本願寺の敵たる故に、晴貞の行動を怒り、五月晴貞の館を圍んで火を放つた。晴貞即ち大乘寺に逃れたが、土民の又之を燒くに及び、その長子晴友と共に河北郡傳燈寺に逃れて遂に自刃した。晴友は祖雲と稱し、大乘寺の塔頭高安軒に住して居たものである。又晴貞の二子彦次郎輝光、三子豐弘侍者は野々市に戦死した。世本晴友を時友に、輝光を輝三又は輝上に作るものは皆誤なるべく、越前三州志は又時友を越中に遁れたとしてゐる。晴貞は越月又は越月齋と號し、最も馬を描くことを好んだ。齋蹟今大乘寺・善性寺等に藏する。法名慈光寺明晴。

**トガシハルトキ 富樫晴時** 石川郡善性寺文書に年不詳五月五日付晴時署名のものがあつて、その花押は同寺藏弘治三年十月二十三日付富樫加賀介晴泰のものと同じ。晴泰は晴貞の初名であるから、晴時亦晴貞のことではなければならぬ。

**トガシハルヤス 富樫晴泰** 晴泰の名は富樫氏の系圖に見えぬが、尊經閣に藏する何事記録と題する書中に、富樫小次郎晴泰が安威兵部光備と、加賀南白江庄の所領を争うて理運になつた天文十四年九月一日附の裁判書が載せられて居て、小次郎晴泰は即ち小次郎晴貞の初名であらねばならぬ。石川郡善性寺文書弘治三年十月廿三日附のものに、加賀介晴泰とあるのも同じ。

**トガシマサイヘ 富樫昌家** 氏春の子。幼名竹童丸。正平十七年(貞治元)桃井直常が加賀を侵さうとした時、昌家の軍は越中に入つ

て之と戦ひ、二十三年(應安元)には斯波義將と共に又直常を討ち、建徳元年(應安三)にも亦義將と共に桃井直和を倒した。後愚昧記に、天授四年(永和四)六月七日祇園興迎を將軍足利義滿が四條洞院に覽んとした時、その機敗を構へたといふもこの昌家のことである。又後愚昧記に弘和三年(永徳三)六月廿五日義滿が昌家の第に臨んだといひ、白山宮莊殿講中記録には元中元年(至徳元)霜月十九日堂社上棟の際富樫介が京都から御劍一振・神馬一疋を下したとある。その死は常樂記に元中元年(嘉慶四)四月に富樫介他界と記されてゐる。法名孚山淨祐。

**トガシマサチカ 富樫政親** (一)政親と赤松氏一富樫政親は成春の子で、幼名を鶴童丸といふた。成春初め加賀北半を得て守護職を稱してゐたが、失政によつて野市を失踪した。長祿二年その跡を赤松政則に賜うたので、成春の被官岩室某等政親を奉じてこれを妨害したが、固より目的を達しなかつた。寛正三年成春流離の中に歿し、政親八歳にして後を受けたが、この頃は山内に居たことと思はれる。次いで應仁元年京都の騷亂には、政親の兵西軍に歸してゐたが、六月九日東軍に降らんことを申入れたところ、細川勝元は富樫氏がその誠意を示す爲、山名・畠山諸氏と一戦すべきことを求めたけれども、之に従ふ能はずして尙西軍に止り、十七日東軍の爲にその營を燒かれんことを恐れて自ら放火したとある。併し應仁記八月廿三日の條には、富小路の釘貫を鶴童丸の衆が持留めたことあつて、既に東軍に歸してゐたことと思はれる。後文明中に至り、政親は舊領播磨・備前・